NPO法人アサザ基金 代表理事

飯島 博さんに伺いました

IIJIMA Hiroshi

霞ヶ浦の再生に取り組む「アサザプロジェクト」が注目されている。飯島博さんに、行政も含めたネットワークによる取組みについて伺った。

2010年8月24日(火)
アサザ基金

問題解決型から価値創造型へ

――自然保護が直面している課題と、その中でアサザプロジェクトの成功の要因を教えてください。

飯島――1970年代から、霞ヶ浦の水質汚濁は急速に広がっていきました。80年代には茨城県により霞ヶ浦の富栄養化の防止に関する条例が施行されるなど、さまざまな対策が取られましたが成果が見えず、90年代には閉塞感が漂っていました。縦割りの行政の壁を溶かし、湖の全体像を描いたうえでの対策を進めるためには発想の転換が必要だと考えました。まず現場からアイデアを探そうと、霞ヶ浦の湖畔を小学生と一緒に歩くことから始めました。そこで出会ったのが絶滅に瀕していた水草のアサザでした。

それまで霞ヶ浦のシンボルはアオコで、水質改善のためにはそれを減らす必要があるという問題解決型のアプローチが取られていました。一方で、霞ヶ浦には、息を飲むほど美しいアサザの花畑が広がっていました。この美しく人を引きつける湖の光景から、残されている湖の固有の美や価値といったものを探し出し、掘り起こしていく価値創造型のアプローチへの転換が、真の問題解決につながると思ったのです。それが市民の自然再生事業としてのアサザプロジェクトのきっかけになりました。

本来、人は新しいものをつくりたいし、そこに喜びを見出すのではないでしょうか。行政による環境保全は、主に規制や制限によって成り立っていますから、人の持つものづくりの喜びを削いでしまいがちです。霞ヶ浦のこれまでの再生プロジェクトの限界もそこにあったわけです。アサザプロジェクトでは、ものをつくりたいという人間の本性に働きかけています。それが成功につながったのです。

〝物語〟が持つ力に注目すべき

――地域づくりには発想の転換が求められるということですが、そこでは何が大切になってくるのでしょうか。

飯島――アサザプロジェクトでは、1995年からアサザの里親制度を導入し、子どもたちがアサザを育て、湖に植え付ける活動を行ってきました。流域の学校での総合学習や企業などでの取組みが広がり、最初200人程度でスタートしたものが、数年後には1万人以上に広がりました。ゴミを拾ってくださいとか、水の汚れを調べるというのは現状維持の発想で

聞き手
菅沼 祐一
編集委員
波津久 毅彦
編集委員
[writer] 駒崎 文男
[photo] 波津久 毅彦

す。これでは展望がありませんし、未来が描けません。しかし、アサザを一人ひとりが1株、2株植えるというところからスタートしても、それが何千何万の人びとのネットワークになれば、湖全体を覆うことができます。霞ヶ浦をこれ以上悪くしないという発想から、霞ヶ浦の眠っている潜在的な可能性へ人びとの目を向けさせ、スイッチを入れることができたと考えています。これこそ〝物語〟が持っている力なのです。物語とは未来につながるビジョンです。ビジョンがないと人は動きません。しかも物語は現在進行形で、新しい物語となる事業が毎年生まれています。物語が動き、広がっていくのです。現在の社会は、多様で分散した個で成り立つ社会です。ですから、市民活動には一人ひとりの小さな物語がとても大切で、そうした物語を描いて、共有し合えるような場をどのようにつくっていくかという、発想の転換が求められるのです。

飯島 博（いいじま・ひろし）さん プロフィール

1956年長野県生まれ。ＮＰＯ法人アサザ基金代表理事。1995年から湖と森と人を結ぶ霞ヶ浦再生事業「アサザプロジェクト」を推進し、現在までの参加者数は延べ20万人に達する。同事業は、「市民型公共事業」と呼ばれている。100年後には、「トキ」の舞う霞ヶ浦を目指している。

「社会デザイン力」を身に付ける

――これからの公共事業や土木技術者としてのあり方をどう考えていますか。

飯島――行政は財政難ですから、社会資本をどう維持していくのかということが非常に重要な課題になっています。予算が削られていく中で、橋や道路や建物などの社会資本のストックを継続的に維持していくためには、初期投資の段階で、運用・維持管理の仕組みを組み込んでいく必要があります。また、行政が投じる初期投資は、民間の動きをつくり上げていくための投資でもありますから、その初期投資を受けるに値するビジネスモデルであるのかどうか、ということを評価する仕組みが必要です。うちに出してくれれば、そのお金を何百倍も活かすことができるし、地域や社会を変容させていくことができるというＮＰＯ、社会起業家、企業をしっかりと評価し、投資を行い、責任を持って育てていってほしいと思います。

一方、波及効果は多様に広がっていくわけですから、全体の中でどういう効果を生み出すのかも考えてもらいたい事項です。これらを総合すると、土木技術者としては「社会デザイン力」を身に付け、個々の土木技術の中に浸透させていってほしいところです。それが、土木事業が国民的な支持を得ていく力になると思うのです。

革新的なアイデアや新しい発想は、ある一人の人間を通して生まれてくるもので、それが創発です。みんなの意見をまとめて平均化するということからは、大胆な発想は実現できません。誰かの中でたまたま新しい発想がひらめく。そして、それを話し合いの中で、みんなのものにしていく。土木の分野は今まで多様なものづくりに携わり、技術と社会システムをつなげてきました。土木の人たちが大胆な発想をすれば、世の中を変えることができる。私はそう思っています。